

正宗白鳥

島崎藤村論

島崎藤村論

— 『夜明け前』 を読んで

一

私は近年丸善、その他の書店へ行った時、西洋の新刊書のうちで最も心を惹かれるのは、いろいろな伝記である。浜の真砂にも譬^{たと}うべき世界各国の無数の出版物のうち、気まぐれに渡来した僅かな新刊書によって判断するのは、軽率のようではあるが、西洋では研究と娯楽とを兼ねた読物として、伝記が流行しているのではあるまい

か。ナポレオンやクレオパトラやネロのような、史上に際立った印象を留めた英雄、美人、暴君の伝記が、新しい史材や新しい観察法によって小説風に面白く書かれて、いるのが続刊されているのみならず、古来の知名の文学者の一生が、新たな色彩を帯びて写し出されている伝記も続々と現れている。旧文学の新解釈に興味があるばかりでなく、文学者の生涯を小説のように面白く書いているものが少なくない。フランシス・グリツブルという人の、バルザック、ルソー、バイロン、ジョルジュサンドなどの数多の文学者伝は、恋愛方面を主として描いてい

るため、ことに面白いのであるが、そうでないものでも興味本位の文学者伝によく出くわす。それらを読みながら、私は日本の文学者伝もこういう風に書いたら、英雄伝に劣らぬほど一般読者に喜ばれるだろうと思っているが、しかし、日本の文学者の生涯は、あまりに凡庸で、薄っぺらで、淡泊で、伝記作者が、手腕を揮って小説化しようにも出来ないのではないかと思われなこともない。西洋の文学者だって、皆んなが波瀾に富んだ生涯を過していたのではないが、日常の生活が日本人よりも何かにつけて濃厚であり、芝居がかっているために、その

伝記が面白いのであるうか。モウパッサンなども変化ある生涯を経た訳ではなかったが、この頃シエラードのモウパッサン伝を読むと、含蓄の深い小説を読むように面白かった。

私は、明治あるいは大正期の文学者の生涯をしばしば回顧することがあるが、何となく「貧寒」といった感じがする。物質的方面から見てそう思われるばかりでなく、精神的にもそう思われる。絢爛けんらんなところも、剛壯なところも、太々しいところもあまりなさそうである。作品だつて未熟であり、栄養不良の感じのするものが多い。環

境が作家個有の才能を発育させるのに適しなかつたもの
かも知れない。だが、いろいろな異つた素質を有^もつた文
学者が、新しい芸術の花を咲せようと努めたことについ
ては、私としては看過し難い気がする。年少より文学を
好み、文壇と名づけられる社会の人と、いつとなしに成
りすました私は、意識するしないに関らず、明治大正の
文学者とその作品とから、多分の感化を、自分の心魂の
上に受けているにちがいないのだ。外国の文学を愛好し
憧憬し、日本の古典にも多少は親しんでいるにしても、
私の作品には、それらよりも、明治大正の文学の感化の

跡がかえって多いのではあるまいかと、自分で疑うこともある。国木田独歩の小説集を読まなかったら、私は初期の習作時代に書いたような短篇を書かなかったかも知れない。チエホフの短篇に心を打たれていたにしても、それは天外から洩れて来る音楽に聞き惚れているようなもので、自分でそういうものを作り出そうとは思っても染めなかつた。が、独歩は直截に私に小説作法を教えてくれた。田山花袋の文学観によつて、私も世間並に動かされたことはいうまでもない。

島崎藤村氏は、感想集『浅草だより』の中で、「最早

二葉亭も旧いとか、独歩も旧いとか、透谷などは全く時代後れだとか、そういうことが形式的に考えられるほど無意味なことは無い。……今日の文芸は日露戦争を一区劃として全く面目を新しくしたといわれるけれど、その文芸の生命はずっと以前に根ざしている。これからさき、何という盛んなジャパニイズ・ルネツサンスとでもいふべき時代が仮りに来ようとも、その新しい文芸はやはり今日の文芸が基礎になって、そこから更に出発して行った人達にはぐくまれるより他はあるまい。世間の公衆は、好きとか嫌いとかの情で、多くその結果をのみ判断する

が、そう飛び離れた文芸の芽が生じて来るように想像されるかと思うと心細い」といつている。これは二十年前に発表された意見で、老境に達してからの藤村氏の言葉ではない。所説平凡ではあるが、若い時分から伝統を重んじる氏の気持は、これによって推察されないこともない。一方ではそういういながら、他方で藤村氏は、「青年は老人の書を閉じて先ず青年の書を読むべきである」ともいい、新を求めて地獄までも行こうとするボードレールの詩には感激している。

伝統を重んじるとともに、新境地の開拓に努めた藤村

氏の六十年間の芸術を、『若菜集』から『夜明け前』まで、私は、自分相応に凝視して来た。しかし、独歩花袋両先輩には感化されていたと信じている私も、藤村氏からは、自分の創作の上ではさして感化されたとは思っていない。藤村氏の芸術はむしろ傍観して来たので、彼れは彼れ、我れは我れという態度を取っていたのであるが、それにかかわらず、明治以来の文学者の誰れよりも藤村氏に対して、私は終始変らない敬意を寄せて来た。私は、藤村氏にだけは、いつも自分から一目置いてかかるという気持がしていた。自然主義全盛時代に、文学に「遊び」

を排して、厳かに人生に接触しなければならぬという思
潮が盛んに唱えられ、鷗外や漱石には遊び気分があると
され、岩野泡鳴などから、通俗作家呼わり、二流作家呼
わりをされていたほどであったが、そういう立場から見
ると、藤村氏ほど終始一貫して、自己の生活と自己の文
学とを融和させ、二にして一、一にして二と喋っている
境地に達した作家は、明治以来なかった喋っている。

「遊び」がなかった。その態度に敬意を寄せたのかも知
れない。「ユウモアの無い一日は、極めて寂しい一日で
ある」といい、「世の中に何が齒痒はがゆい喋って、ユウモ

アの通じないほど歯痒いものは無い」と、自らいっている藤村氏の文学は、決して重苦しく渋面をつくっているのではなく、泡鳴のように真剣を烈しく揮っているのではないが、正座して人生を見極めようという態度は六十年間を通じて崩れていかなかった。それで、もしグリツブルやシエラードのような伝記家が明治文豪伝を書くとする、藤村伝が最も書き栄えがあるだろうと思われる。明治文学者のうちではコクがあるように思われる。私は、藤村氏の文学的天分が群を抜いているとは思っていない。その作品が必しも傑出しているとは思っていない。

鷗外の聡明なる頭脳、漱石の豊かな文才こそ、他の群小作家を圧していると信じているが、藤村氏にはコツコツと倦^うまずたゆまず自分の道を歩んで来たその辛抱力に感心するのである。「人の一生は重荷を負うて遠くへ行くが如し」といった感じがする。鷗外漱石その他或る種の作家のように楽々と筆を運んだことはなかったにちがいない。出たとこころ勝負で書きなぐることなかなかなかった。紅葉山人の身を削るような文章上の苦心は、世に伝えられてはいるが、しかし、山人の苦心は文章だけの苦心で、出来上った自己の文章に、自己陶醉をして門弟などに誇

ったであろうが、藤村氏にはもつと深い文学的苦勞があったらしい。氏は、フローベルの「稟才は根気なり」という言葉をしばしば思い出しているが、この言葉は、氏の作品の批評にもなるのである。私は、氏の才能に感心するよりも、その根気に感心するのだ。明治以来の作家に最も欠けているものはこの根気である。傍で何といわれようと、氏は黙々としてこの根気をも失わないで来た。「運、鈍、根」という諺は氏の生涯に当て嵌められそうにも思われる。「私のようなものでもどうかして生きたい」と、氏はある小説の中に書いている。「どうかして

人生を知りたい」と、氏はそれを絶えず望んでいた。誰れだって、どうかして生きたいし、どうかして人生を知りたいのだが、氏の小説を読むと、その気持が痛切に根気よく現れているのだ。藤村小説集を読む人は、このどうかしてという気持がねばり強く出ているのに目を留めるように私は忠告して置く。案外藤村氏の小説よりも遊び派の漱石の小説などの方に、人間の心理が深く洞察されていていることもあるのだが、私は才不才、能不能よりも、人間の態度に、時としては一層多くの敬意を払うことがあるのである。

「何とかさんは、茶屋酒に浸りながら、雑誌記者を次の室へ待せて置いて、一篇の小説を書き上げたそうです」
とか、「誰れとかさんは、一晩に五十枚も書くそうです」
とかいって、「世の中にはえらい人もあるものだ」とい
いそうな顔をして、私に話して聞かせる人もあったが、
私はどうもそういう人をえらい人として尊敬する気にな
れない。どうかして人生を知りたいと望んで筆を執って
いる作家の態度如何に心惹かれる。

新聞や雑誌の連載物を日を追ひ月を追って読み続け得ない私は、『夜明け前』をも、ところどころ瞥見べっけんしていったのに過ぎなかつたので、今度その第一部が纏まとまって出版されるに及んで、はじめて通読した。年を取ると回顧的になり、考証趣味も出でて歴史に興味を覚えるのが人間の通有性らしく、露伴鷗外諸氏は晩年頻りに史伝や歴史小説を書くようになった。この二氏の歴史癖は不思議でもないが、田山花袋氏のような作家も晩年には歴史物

を書きだした。藤村氏が維新前の世界を小説の題材としたのもちよつと意外に感ぜられたが、氏として、筆が行くところへ行つたので、他の作家のような単なる好奇心や好古癖などに基づいていのではない。どうかして人生を知りたいと望んでいた氏は、詩を棄てて小説に転じたのだが、『千曲川のスケッチ』『生立ちの記』『桜の実の熟する頃』『春』『家』『新生』その他幾多の短篇や旅行記において、自己と自己の周囲の種々相を見詰めて来た。そこで、自己の生れる前の時代に人生探索の目を向けたのは、氏のような態度の作家には、当然の順序であ

る。用意周到の氏は、自己を描き、「家」を描き、それから「時代」を描かんと企てた。そして、この『夜明け前』は、歴史小説であるとはいえ、『家』と同じ態度で書かれている。ここにこの作者の態度に敬意を払うとともに、これが如何に難事業であったかを痛感して、読む方で苦しくなった。

幕末の史実は、大衆作家などによってさんざんに踏み躪にじられているので、私はその時代について考えても嫌悪を覚えるようになっていた。『夜明け前』の作者が剣劇的誘惑にかからないのは当たり前であるが、いわゆる「遊

び」のない作者は、こういう題材に向ってどう筆を着けていいか、手も足も出ない思いを幾度もしたのじゃないかと疑われた。作者が『家』の舞台であった木曾の谷間から、崩壊せんとする幕府の末の世を見たことにしているのは、現実感を強くする上からいっても用意がいろいろだ。しかし、『家』とはちがって、過去の世界をいきいきと描き出すためには、豊かな想像力が必要なのだ。ところが、藤村氏はあまり想像力の豊かな作家ではない上に、自分で想像を駆使することを遠慮している。劇的事件が続々と出現しているのに、作家は少しも劇的に取り

扱っていない。等持院の足利尊氏の木像の首を抜き取って三条河原に晒さらした尊王党の一人が木曾まで逃げて来たのを土蔵に隠して置くという事実についても、小説読者は、ここで何かの葛藤が起るかと待ち設けているのに、興味本位で世間を見ない作者は、この志士がその隠れ家を出て江戸へ旅立ったことを書いているだけで、幕府の捕吏と斬り合ったりなんかしていない。作者の調べた事実がそうであったのを、面白ずくで曲げて書くことは出来なかつた。横浜で外人から受け取った生糸売り揚げの利得のうち、小判で二千四百両の大金を、木曾まで送り

届けるので、その任に当った老学者は、「前途百里の思いに胸の塞がる心地」がした。小説読者も、途中で何かの変事が起るにちがいないと危まれるのに、人も金も無事に木曾の谷に着いただけで終って、読者に張り合い抜けをさせている。事実がそうであつたから仕方がないという訳だ。

『新生』は、個人の心の苦悶を叙した主観的作品であり、『家』は、或る家族の推移を描いた客観的作品であり、『夜明け前』は、過去の或る村落が時代の波に動かされる有様を印象的に叙せんとした作品で、作中人物の

個性を描くことに重きを置いてはいない。ただ若い人々と老いたる人々とは対照されているくらいであるが、それらの人々が或る種の老若の型のようにあつて、読者に迫つて来る力を欠いている。『家』の人物は奇を弄しない叙述のうちに、我々の胸に浸染する人間性を示して、出沒するのだが、ここに挿まれている人物、宿役人の吉左衛門や金兵衛や、田舎医者こうぞうの宮川寛齋や、それらの後継者たる半蔵や香蔵、あるいは半蔵の妻お民などは、南画の点景人物たる以上に、あまり人間的特色を發揮しないようである。作者の意図がはじめからここにあつたの

であろうか。

「この節は何でも力づくで行こうとする。力で勝とうとするような世の中になって来た」というそういう世の中を観察して、それをいろいろの方面から見て行こうとするのが、作者第一の意図であるにはちがいない。それから、力づくの混沌たる末世を現すうちに、もとおり本居、平田などの復古思想、「自然に返れ」という天啓的叡智が、この混沌たる末世にも何処となくきらめいていたことを観察し、「どうかして生きたい」という集団的人間性を描かんとしている。従って、伊勢大神宮のお札が下って、

「ええじゃないか」と、世直しの陽気な唄が盛んに唱えられたところで、長篇の第一部が結ばれているのは、この作者の他の小説に見られる如く、一つの象徴的叙述となっているのだ。用意周到の作者は、起稿のはじめから、この「ええじゃないか」の民衆的陶醉を頭に置いて、ここまで長い道中をコツコツ書いて来たのだ。「あの本居翁の書き遺したものにも暗示してある武家時代以前にまでこの復古を求め大勢が押し移りつつあるということはおそらく討幕の急先鋒をもって任ずる長州の志士達ですら意外とするところであろうと彼には思われた」と

書かれているが、作者が、「この復古を求めると大勢が押し移りつつある」微妙な実相を一篇を貫いて描かんとしていることに、読者たる私は最も目を着けなければならぬのである。作者は声を大にして、それを説いてはいないが一篇の生命になっている。「半蔵の耳には思いがけない新しい声が聞えて来た」と、作者は結末になっている。っているが、半蔵が偶然友人に誘われて江戸に出掛けて、平田家に入門の誓いを立てたのも、父の病氣平癒を祈るために御嶽神社参籠おんたけさんろうを思い立ち、平田篤胤の講本『静しずの岩屋』を持ってそこに出掛けて、王滝の宿で、さびしく

聞えて来る夜の河音を耳にしながら、その先覚者の書を
読み耽るところなど、作者は、この山間の青年を通して
時代の暗黙裏の推移を、絶えず描写しているつもりなの
だ。この青年も自覚しているのではなく、暗黙裏の推移
に動かされているので、最初江戸へ行つて入門したあと、
江戸の光景などを見て、「世は濁り、江戸は行き詰り、
一切のものが実に雑然紛然として、互いに叫びを挙げて
いる中で、どうして国学者の夢なぞをこの地上に実現し
得られようと考え、自分のような愚かなものが、どうし
て生きよう」と藤村小説中の人物らしく考えつづけてい

る。將軍の上京、皇妹の御降嫁、各藩の有名な志士の往来や論争、武田耕雲齋一党の決死的闘争など、この時代の大事件は、概して噂の聞書程度に書かれ、記事文程度に書かれているに過ぎないので、読者を退屈させるのだが、これは作者が表面的華々しい事件よりも思想の隱微な推移の方に重きを置いているためでもある。「半蔵さん、君は時々立ち止ってじっと眺めているような人ですわね」とか、「香蔵さんがまた極りを始めた。君は出し抜けに何かいい出して、ときどきびっくりさせ人だ。しよっちゅう一つ事を考えてるせいじゃありませんか

ね」とか、作中の二青年は、在来の藤村小説中の人物らしく現されているが、作者も、この波瀾多き時代を取り扱った長篇において、しよっちゅう一つ事を考え、時々立ち止ってじっと眺めている。ところで、読者は作者とともに、一つ事を考え、じっと眺めているのに退屈して来るのだ。対象が潑刺として動いていないのに歯痒くなることがある。

ルソーは「自然に返れ」といった。それがフランス革命の原動力ともなり、近代の思想や文芸の根本精神ともなった。「本居宣長が古代の探求から見つけて来たもの

は、直毘なおびの靈みたまの精神で、その言うところを約つづめて見ると、自然に帰れと教えたことになる。より明るい世界への啓示も、古代復帰の夢想も、中世の否定も、人間の解放も、または大人のあの恋愛観も、物のあわれの説も、すべてそこから出発している」という、その思想の動きを、作者は、時々立ち止ってじっと見詰めている。

ここで思い出されるのは岩野泡鳴である。泡鳴と藤村とは、共に自然主義作家と見做されているが、その作風の非常にちがっていることは誰れにでも分っている。ところで、泡鳴は早くから、この本居平田の復古思想に共

鳴し、日本人の日本人らしく生きる道をそこに発見し、古代神道を熱烈に讚美し、その生々主義刹那主義を喜んだのであった。例の粗雑な文章で、周圀に当り散らして傍若無人に説き立てたので、読者の反感を買い、真面目に相手にされなかつたのみならず、新時代に不適切な馬鹿げた古くさい思想のように思われていたが、しかし泡鳴の見解にも、今日になつてよく読み直して見たら、棄てがたい味いがあるかも知れない。「過去に探求の目を向けた先人はもとより多い。その中でも、最も遠い古代に着眼した宣長のよゝな国学者が、最も新しい道を発見

して、その方向を後から歩いて出て行くものに指し示した」と、『夜明け前』に書かれているが、泡鳴の自然主義は、外国の自然主義文学よりも、日本の上代の思想に一層多く刺戟されて生み出されたのだから面白い。「平田先生は本居先生よりももつと露骨だ。考えることが丸裸だ——いきなり生め、殖^{ふや}せだ」とも書かれているが、泡鳴の露骨主義、実行即芸術説は、本居の説を実行の方へ進めた平田の潑刺たる意気に匹敵している。それで、私は、芸術家としての素質が泡鳴とは類似性の乏しかった藤村氏が、『家』や『新生』あるいは、『エトランゼ』

の時代の人生経験を経て、泡鳴と同じように、古代に日本人の真生命——如何に生くべきか——を見るに至ったのも面白く思うのである。「古いにしへながらの古に帰るのでもなく、新しき古を発見し、新しき古を人智のますます進み行く近ちかつ代よに結びつけて考える」ことに深い意味を見たのは、泡鳴も藤村も同様である。藤村氏は以前から簡素を尊ぶ人であったが、しかし、『若菜集』以来の氏の文学や思想は、上代ぶりの簡素直截のものではなかった。『夜明け前』の文章だって簡素直截とはいいがたく、枯淡の味がありとはいいがたい。そして、氏特有の文

章のうるおいといったようなものは、いくらか稀薄になつてゐるように思われる。

三

とにかく、藤村氏の新作は、日本では新しい型の歴史小説であるといつていい。田山花袋の『源義朝』の、作者が史上の人物になりきつたような書き振りともちがう。森鷗外の『伊沢蘭軒』や『澀江抽斎』しぶえちゆうさいのような、故人の史実を的確に記述しつつ、自然に時代と人との面目

を浮き上らせる書き振りともちがう。当時の動乱の本源地からは懸け離れている、木曾山中の、いうに足りない小村落の凡庸な実生活を叙して、時代の背景をあるいは遠くあるいは近く、えんえん 蜒々と起伏させ、目に見えぬ思想の流れをも絶えず取り入れているので、歴史小説に対する作者の抱負は小でないといっている。だが、志したところは達せられたのであろうか。私は、この長篇の第一部を読み終って、近時の日本の文壇には珍しい大作であると感じ、啓発されたところも少なくなかったのだが、何となく物足らぬ思いもした。『家』や『新生』を読み終

ったあとで感じたような圧力が感じられなかった。この作者もかつていっていた如く、イブセンやツルゲネーフの作品には、書かれている者よりも書かれていないところに大切なものが潜んでいるのであり、『家』や『新生』にもそういうところがあり、筆を抑圧して説き尽さず、底にいろいろなものを潜めているのが、藤村氏の作風であるのだが、『夜明け前』ではそんな感じがしない。作者が筆を惜しんでいるというよりも、作者の筆が萎縮しているという感じがするところがないでもない。

トルストイの『戦争と平和』は、ロシヤの片隅から、

ナポレオンが歐洲を踏み荒している時代の光景をのぞき見しているといつていい書き振りなのだが、多くの人間の描写が縦横自在変幻出没の活気を持っている。トルストイの想像力の豊かさは驚嘆すべきものである。『夜明け前』は、作者の態度がちがっているので、トルストイの小説に比較するのは不当のようでもあるが、いくら個々の人物描写が主要な目的となっていないにしても、ここに現されている幾人かの老人や青年の面目が、南画の点景人物的にあまりに稀薄に過ぎる。お上品過ぎるといっていいかも知れない。『家』において見られるよう

な夫婦間の暗闘、親類同士の面倒な関係、そういったよ
うな現実味が、『夜明け前』にはいきいきと書かれてい
ない。幕府の統治力が衰えて、無法な命令や暴力の横行
によって村民が苦しむことは、少しくどいくらいにたび
たび書かれていながら、村民苦痛の光景が、具象的芸術
の冴えをもって現されてはいない。それは、注意して物
を見、物を聞き、物に触れるのを例としている作者は、
『家』の材料については知るところ多く、人間性の真実
の現れをいろいろな点から観察し得られ、筆を採りなが
らも、描かんとするものが明晰に眼前に現れていたので

あろうが、『夜明け前』では、いくら当時の史実、当時の村落の生活状態を、記録や、古老の話などによって詳しく調べたにしろ、『家』よりも一層間接的であるため、あれほど明晰に真相を観察し得られなかつたためではあるまいか。

氏は、二十年前の感想集『浅草だより』の中で、「黒船」と題して、「歴史小説としても、歴史画としても、面白い題目ではあるまいか。私はこの秋、木曾に旅して、姉の家であの船の図を見出した。半紙一枚ほどの大いさの古い粗末な木版画だが、それを見ると、当時のことも

想像される。いかにあの船が当時の人の眼に映じたらう。そのために幾何いくばくの人が狂死したろう」といつている。二十年後に大作『夜明け前』の現れる糸口を、私はここに見つけたような気がするのであるが、氏はその感想につづけて、「歴史」と題して、「現代というものを研究すればするほど、過去の歴史に書いてないことの沢山あることが分る。過去の歴史を読んで見れば見るほど、現代の真相もある程度までしか歴史の上に伝わって行かないような気がする。今の教育は、あまり歴史上の人物に重きを置き過ぎる。いかに古人に傑れたる人があったとは

いえ、要するに過去の人である。われらと何らの直接的な交渉もない人である。古人を友とすということもあるが、それは自己を見出し得るにとどまる。われらに取っては、例え平々凡々でもそこらに歩いている男や女の方が、昔のエライ人達よりも大事だと思ふ場合が多い。こうして生きているということは、どれほど大切なことだか知れない」といつている。若い時分の藤村氏の考えそうなことで、その頃はまだ自分で歴史小説を書く気にはなっていなかったであろう。しかし、年を取るにつれて、氏も過去の時代の真相を索ることに、興味を感じ、深い意味

を感ずるようになったのだ。現代を見極めるには、過去をも討究しなければならぬと、痛切に感じだしたのであろう。過去の人が「われらと何らの直接的な交渉もない」といい切れなくなつたのであろう。しかし、氏は、いざ歴史小説に筆を採るとなると、「そこらを歩いている男や女」のように、過去の男や女を鮮明に描くことが難しかったのである。半蔵にしろ香蔵にしろ、吉左衛門にしろお民にしろ、陰影が乏しい。鮮血が流れているらしくない趣がある。作者の手を離れて自然にそこに動いている人間というよりも、強いて作り出された人間といった

感じのする所もある。過去の人間に作者が自己の影を見出したのはいい。そうでなければ、藤村氏ほどの人が、単なる面白ずくから、歴史小説を書くはずはないのだ。過去に自己の影や知人の影や、現代の影をも見るのはいが、過去の世界を小説の舞台にとると、それらの影が生氣を失い、萎縮し、窮屈そうになるのを、私は遺憾に思う。

明治以来、歴史小説には傑れたものが極めて少なかった。森鷗外の短篇に幾つかの傑作を見つけられるくらいなものだ。鷗外はさほど力を籠めて創作の筆を執ったら

しくもないのに、その歴史小説は、現代小説と同程度に楽々と書きこなされている。その他では、やはり『盲目物語』が傑出していて、その作者の想像力の豊かなことを証明している。私は繰り返していう。藤村氏が、『家』において一むれの人間を写實的に描いたと同様な態度で、『夜明け前』中の人物と世相を描き出そうとしたのはいい。しかしその世界が過去であるために、写實的筆致を自由に駆使させる原動力たる想像力を要することが大であって、従って藤村氏も十二分の効果を挙げ得なかったと、私には思われる。

木曾の自然を描いたり、村落の年中行事を描いたりしたところには、作者特有の詩趣があり情趣があり、老いた筆になおみずみずしさを失っていない。それで、私は、半蔵の御嶽山参籠のあたりを、情景かね備った名文章として愛誦した。

伝統を重んじるといっても、伝統にもいろいろある。『夜明け前』も、後篇はどう発展して行くか分らないが、前篇だけについていうと、漢学や仏教によって毒せられない上代の朗らかな、おのずからなる人の気持や行動が、尊き日本の国粹であり、その古に返ることによって、純

真の生の歡喜が得られそうに、作中の人物も、作者自身も考えているらしい。文学についていっても、古事記万葉集の伝統を重んじることになるのだ。その古い泉は、その流れを汲む者にいつも清新な力を与えらると思われた。明治後の新代においても、そこに気づいた者が少なくなく、今なお万葉は盛んに流布しているようである。菊池寛氏が、二月号の『文藝春秋』所載の「話の屑籠」のなかで、「日本のあらゆる書籍の中で、ただ一つだけ選択せよといわれたら、自分はいつでも万葉集を採るだろう」といっているのを読んで、私は不思議に思ったが、

それほどに万葉集は今日の文壇人に重んじられるのである。徳川期に真淵宣長などによって真価の発見された万葉古事記の伝統的魅力は、私もこれを是認している。万葉の和歌は永久に日本人の心をそそるにちがいない。しかし、嬰兒の如くならなければ天国に入られないとしても、我々はいつも赤ん坊のような気持で人生に対してはいられない。人間の真相世界の真相はそんなにお目出たくはないのである。舌たらずの赤ん坊の言葉で天地を讃美してなんかいられないのである。日本人が外来の仏教なんかに感化されたのも、上^{かみ}つ代^よの単純な思想では満足

されない心の動きの結果であつた。赤ん坊が成長したのであつた。そして、次第に、日本通有の人生観とか、日本趣味とかいうようなものが、発達の道を取つた。文学についていっても、今なお日本人の心魂を動かすに足る伝統的文学は、万葉古事記系統のものばかりではないのだ。

私は過去の日本文学を回顧して、『平家物語』なんかを、伝統的日本文学の精粹のように思っている。それから『徒然草』に日本趣味が最もよく現れていると思つている。あそこに現れている花鳥風月趣味、生活について

の注意、人事に対する好悪の気持にあの頃の日本人らしさが見られるのみならず、今日の日本人になおあの趣味が残っているのだ。芥川龍之介は、何処かで、『徒然草』を詰まらない書物としてケナしていた。藤村氏も、「文章の美しいものが古典としてすぐれたものだ。われわれは先ずこの偏見を破らねば成らぬ。この偏見は古代の僧侶の書いたものから兼好の徒然草のようなもののみを尊重させた」といい、この僧侶の随筆集に重きを置いていないらしい気ぶりを見せている。また、兼好が「四十にして死なんこそ、めやすかるべけれ」といいながら、「如

何にして住まんか、如何にして食おうか」と、そんなことを頻りに書き、芋を食って万病を治した坊さんのことまで書いているのを、「厭世家の養生」だと、やや冷かしたような調子で批評している。私はこの二氏の説に反対ではない。『徒然草』は詰まらないといえは詰まらない書物なのだ。叡智にみちたパスカルの随筆とはちがっている。しかしこの随筆集を詰まらないというのは、日本趣味を詰まらないということになるのである。日本趣味なんて要するに徒然草趣味なので、その審美観、人生鑑賞は深くも高くもないのである。そして、作品を通し

て見た芥川君には多分の徒然草趣味が認められるが、藤村氏といえどもかなり徒然草趣味を有っていられそうである。だから、私は、よくも悪くも、日本趣味の経典としてこの随筆集を愛読している。「世を厭いながらなおかつ生きんと志した」矛盾に満ちた生涯は、我々をして兼好に親しみを深くさせる所以で、方丈記の作者も薬草を植えたりしている。孤独主義の芭蕉も、頻りに人懐しがって、門人に会うことを喜んでいた。

藤村氏は新時代の青年であつた時から伝統を重んじた人である。それが氏の新文学の強味であつて、晩年の今日

に至るまで読者の信頼をつないで来た所以である。軽薄なところがない。だが、氏の作品には、遊びがなく、鈍重であり、慰みに読まれるものではないのに、なぜ、花袋泡鳴秋声など同類の作者よりも多数の読者を得ているのであろうか。氏の筆には感傷的の甘さがあると一般にいわれているが、私にはそうも思えない。氏の小説を読んだあとでは、明るい感じよりもむしろ陰鬱な感じを残されるのを私は例としていた。生きることの悩みを説いたのは、藤村ばかりでなく、泡鳴も花袋も同様なのだが、後者の方はもっとサツパリしていて、藤村の方はもっとねち

ねちしている。ねちねちして齒切れが悪く陰鬱ではあるが、藤村氏の作品には博大の心といったようなものが何処となく漂っているために、読者が馴な付つくのではあるまいか。博大の心というものはどうかすると感傷趣味に墮する恐れがあるが、藤村氏は他の某々作家のようにそこまで低下してはいない。この心は明治以来の作品には欠乏しているのである。氏が『新生』のような宗教的感情の高調に達した、日本文壇に比類なき名作を出したのもそういう心を有っているためである。『夜明け前』が全部完結したら、読者たる我々はという高い所、あるい

は深い所へ連れて行かれるか分らないが、この前篇だけについていうと、作者の捧げている伝統的灯火に、私は余り心を照らされないのである。博大な心は相変らず見られるが、その心を導く洞察的眼光が弱い。そして、歴史小説だから過去を過去だけのこととして描き、過去の道を照らした明りは、ただそれだけの明りであるとして見るのでは物足りない。これは人物その他において、作者の描写が手薄いためではないだろうか。私は平家物語を単なる昔物語として読んでいないので、我が藤村氏の最近作を昔の物語として読むのでは飽き足りないのだ。

四

「一切は神の心でござるであろう」と、篤胤の遺著『静の岩屋』の中から取り出した言葉で、三年間の努力の結果である長篇の第一部を締めくくった藤村氏は、「何となく今夜は眠りがたい」と附記して筆を擱おいた。氏として感慨無量なるものがあつたであろう。氏の如く四十年にも渡つて、たゆみなく創作の筆を執りつづけて来た文学者は、現代日本では絶無といつていいくらいに稀なの

である。しかも氏は老いてなお、今度のような大作に従事する根気を持っているのだ。私は読み終ったこの大作を前に置いて作者自身の通って来た道を回顧したばかりでなく、透谷、独歩、花袋、泡鳴を追想した。そして、自分がこういう人々と時を同じゅうして生きて来たことを考え、自分もこういう人々の後を追って、やがて「壇の浦で斬死にするか水底の藻屑となるかするのだ」と考えたりした。

私は幼少の頃、今から四十年前に、『文学界』という純文学の同人雑誌を、よく分らぬなりに愛読したことが

あつた。藤村氏も同人の一人として、その雑誌に盛んに書いていた。詩か戯曲か浄瑠璃か、今思い出すと、よほど変^{へんてこ}なものが書かれていたので、多分藤村全集にも収められていないだろうから、若い藤村崇拜者は知っていないであろう。明治二十五、六年の頃で新時代の文学が起りかけていた時分であつても、要するにまだ文学の戯れに過ぎなかつたので、藤村氏もはじめはその戯れに耽つていたので。それから脱却して、遊びのない文学を志して、根気よく修業を続けた。花袋も泡鳴も文学を熱愛した根気のいい人で、多量の生産をしたのだが、それら

の作品は、文学史上の残骸たるに留まって、今日以後の読書子の目には、何の魅力もないものになってしまおうのであろうか。一時意気旺さかんであつた新劇運動も、日本の地質に適しなかつたのか、要するに無駄骨折りで、何の効果をも現さなかつたと、この頃おりおり噂に上ることがあるが、花袋泡鳴その他あの時分の人々の作品も、あの時分の新劇と趣を同じゆうしているのであろうか。もしそうだったら、諸氏の根気も要するに無駄骨折りみたいなものであつた。そう思つていいのか。だが、もし諸氏の作品が真の人間世界を、外面からでも内面からでも

よく描出していたなら、そうたやすく魅力を失うはずはないと私には思われる。人間というものを本当に知りたいたいという慾望を有った人はいつの世にも存在しているはずで、そういう人々は、根気よく人生の奥底を描破した作品に心を寄せないはずはない。泡鳴花袋時代のいわゆる自然主義文学にしても、藤村氏がしばしば推讃している二葉亭独歩透谷の文学にしても、次第に読書社会に影の薄い存在となると、それらの作者が人間を徹底的によく書いていなかっただか、あるいは人間の真相を知りたい慾望を有った人間が少なくなりつつあるためなの

であろう。両方とも本当であるかも知れない。

藤村氏は、「多くのすぐれた人達の書いたものを見て
も、真に創作として許すべきものは、その人達の全生涯
を通じて数えるほどしかない」また、「真の人間を書く
ことに骨折りたいとトルストイがいったという。ある時
は人間を天使にまで持ち上げる、ある時は人間を悪魔と
して踏みつけるようなそういう見地から書かれたもの
は、たといその人間の衝動がどんなに生き生きと書かれ
てあっても、長くは私達の心をひかない。そして、そう
いう衝動が色濃く塗ってあればあるほど真の人間という

ものから遠いように思われる」といつている。こういう氏の説から推して見ても、明治以来の文学に、創作として許すべきものはそう多くはないのではないかと思われ。在来の定評に捉われないで、過去の文学を検討する文学史とか作家伝とかが出てもいいのである。そこで真の人間を書くには、どういう態度を持したらいいかというところには困難な問題で、自然主義作家は殊更醜いことを描くと非難されたものだが、ここに引用した藤村氏の見解は、文学の正道であると思われる。人間を観察する態度人間を描く態度は、正にかくあるべきもののように

思われる。ところが実際の作品について見ると、氏の見解が当たっているとばかりはいわれぬ。文学芸術は微妙なものである。人間の真相を洞察するのも描写するのも靈妙不可思議な作用のものである。「楽才は根気なり」という言葉の意味は年少の頃から動かすべからざる世上の真理として聞かされていて、それに反対するのは横紙破りのようであるが、少なくとも文学芸術については根気は根気楽才は楽才で、根気だけで達し得るところは高が知れているように、この頃の私は痛切に思うようになってきた。我々は何十年かなり根気よく書き続けて来たが、

やはりどうにもならないと絶望を感じている。この『夜明け前』読後感執筆中に、非常に真面目な態度で、自分で自分を鞭打っているような態度で書かれた或る青年作家の小説を読んで、その心掛けに或る程度の感心はするもののそういう態度だけで人生の真相が描かれると、今日の私は思えなくなっているのだ。徳富健次郎氏の『富士』にしても、自分の生涯をむき出しによく書いていると思うだけで、人間の真相が厳然と我々に迫って来るようには感じられなかった。

人間を天使と見たり悪魔と見たりする小説は、坪内博

士の『小説神髓』以前の小説というべく、今日では、大衆小説通俗小説を除いたら、そういう態度で筆を執るものはなくなっている訳だが、バルザックなんかを読むと、彼れは、そんなことに頓着なく、人間を強烈な悪魔にしたり純白な天使としたりししながら、その描写は真に迫って我々に人間の心を見させているのに驚かれる。モウパッサンは男女間の微妙な心理をよく描写したといわれているが、伝記によって見ると、彼れは三十歳以前にすでに黴菌ばいきんに肉体を冒されていたので、『女の一生』の作者が生なまの現象を理解する力の次第に混濁して行ったのも、

トルストイのいつているように、長篇小説の成功と新聞雑誌の評判と、社会殊に婦人の阿諛あゆと、出版業者の酷きびしい要求に誘惑されて軽々しく筆を執ったためばかりではなく、彼れの頭脳が悪疾によつて腐蝕されていたためであつた。だがトルストイもいつているように、モウパッサンには天才があつた。彼れは要素から事物を見た。だから無意識のうちに真理も発見した。この真理は、トルストイの考えていたような道德的真理ばかりでなく、人間関係のいろいろな真理なのだ。それから、伝記学者の研究によると、モウパッサンは我々が想像していたよう

な遊蕩児ではなかった。彼れの小説は、必ずしも彼れの
実験記録ではなかった。そういうことを考えるにつけ、
傑れたる文学芸術は究極するところは、天才の無意識の
産物で、法則も何も必要なのは初歩の間だけなのだとい
うことに、話が落ちて来る。

藤村氏をはじめ、明治以来のいろいろな作家評家に感
化され指導されて来た私も、この頃になって、創作はむ
つかしいものだとつくづく感じるようになった。「創作
として許すべきものは滅多にない」と、藤村氏のいった
のは本当である。

私は、氏の旧作を、ところどころ読み返して、『新生』と『エトランゼ』とに、以前読んだ時にも増して、最も推服した。これらのものはただの写生や身の上話や見聞録ではない。これらこそ、滅多にない創作中の創作として許すべきものだと思われる。『新生』を泡鳴の『放浪』に比し、『エトランゼ』を荷風氏の『仏蘭西物語』に比して考えると光彩は更に加るのである。

日本文学電子図書館

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2002年6月14日 第1刷

日本文学電子図書館